帝国大学における宗教学の展開（東北編）

高橋　原

０．はじめに　各帝国大学宗教学講座の「学風」論の射程

筆者はかつて、戦前の東京帝国大学宗教学講座の教員スタッフの変遷と開講科目および卒業論文題目の一覧を素材に、帝国大学における宗教学の展開を検討したことがある[1]。通常、日本の宗教学の形成といった観点の研究においては、個々の研究者の著作に即して研究内容の吟味を行なうことが常道であろうが、学問というものは、社会にその必要を認められて、研究と教育の場である大学という場所を与えられることによって発展するのだと考えるとき、アカデミズムの方を向いた研究活動だけではなく、大学においてどのような講義が行なわれ、そこにどのような学生が集ったかを検討することで、より広い裾野を持ったものとして学問の姿を浮かび上がらせることができるのではないだろうか。

東京帝国大学宗教学講座に関していくつかの興味深い発見があった。教員に関しては、従来、東大の宗教学講座というと創設者の姉崎正治とその後継者の岸本英夫に注目が偏ってきたが、両者をつなぐ時期に宇野圓空が欧米の宗教理論を積極的に教育に取り入れて、その後の日本の宗教学の発展におおいに寄与したということがわかった。これによって、おおまかに明治～大正を第一期、大正～昭和戦前期を第二期、戦後を第三期とする時代区分で日本の宗教学の展開を考える道筋ができたと考えられる。もちろん、ここには「東大中心史観」の偏りがあり、これをもって日本の宗教学の展開を代表させることには慎重でなければならないだろう。また、卒業論文の変遷からは、明治期においては「煩悶の時代」を反映してか、宗教エリートの内面的境地に関心を持って集まった学生が多かったのが、大正期以降、学問の成熟とともに宗教理論や学説へと関心が移っていったことがうかがわれた。

本稿では、筆者が東北大学に赴任したことを機に、東京帝国大学宗教学講座を対象に試みたことに対応するような資料の東北版の提示と考察を行なおうと計画したが、資料上の制約などからその困難さに直面することとなった。制約というのは、太平洋戦争によって東北帝国大学が空襲の被害を受け、多くの文書を焼失したということが大きい[2]。東北大学史料館に保存されている便覧類は年度のばらつきが多く、文学部教務係の保管庫には学生の実家の連絡先等を記した学生原簿が存在したものの、講義名や卒業論文の題目などを記録した文書は見つけられなかった。

そこで方針を転換して、本稿では、入手できたかぎりの講義題目と卒業生名簿、卒業論文題目の提示とともに、初期教官達のプロフィールと業績や東北大学宗教学講座関係者による自己言及を参照して、東北大学宗教学講座の「学風」について、東京大学の例と対照しながら考察してみたい。そもそも「学風」というのはたまたま着任した教員の業績などを手がかりに、研究室の片隅や、学会後の懇親会などの場でまことしやかに囁かれるきわめて曖昧なもので、根拠に乏しいものであることが多い。筆者は東京大学の宗教学研究室の雰囲気の中で過してきたが、そこでは、京大宗教学の宗教哲学重視に対して東大の宗教学は「実証的」であるといった語りをしばしば耳にしてきたという印象を持っている。しかし、内実を具体的に吟味せずに「実

証的」といってもあまり意味がないことは言うまでもない。おそらく、このような語りのひとつの起源は岸本英夫が『宗教学』（大明堂、1961）の中で「宗教哲学」と区別される客観的、科学的、体系的研究として規定した狭義の宗教学を定義したことに求められるが、必ずしも、代々の東大の教員がそのような学問姿勢に同一化してきたわけではないのは言うまでもない。そのような語りの中で、たとえば浄土真宗の僧侶であった宇野圓空は、東大の教官となるに際して（ポストは東洋文化研究所教授）、国立大学の教員は客観的・中立的であるべきだとして僧籍を離脱したというという話が知られているが、これも「実証的」な根拠が曖昧なまま流通しているエピソードの一つである[3]。また、あるべき宗教学の姿と東京大学宗教学の学風論の結びつきの背景には、京都学派の宗教哲学が世界的に知られるものとなっていくなかで立場表明を迫られているという意識のようなものが働いていたと考えられる。さらに、1980 年代、90 年代に中沢新一や島田裕巳が多くの読者を獲得したことも、宗教学の「本家」がいかにあるべきかという思考の一契機となっていたであろう。

そのような学風論の語りの中で、歴代の教員には浄土真宗の背景を持つ者が多く、学問的には地域的な特性を活かした民俗調査を得意としている、というのが断片的に耳にした東北大学の宗教学に対するイメージであったように思う[4]。しかし実際に東北大学の当事者の自己言及的な語りを見るとやや趣が異なり、木村敏明は「東北大学宗教学講座の学風として、実証的研究と哲学的研究の総合ということがしばしば主張されてきたが、それが当講座第二代教授石津照璽博士を範としたものであるということは誰しもが認めるところであろう[5]」と書いている。鈴木岩弓は「本講座の伝統は、石津以来の宗教の哲学的研究と実証的研究の統合を志向する研究視角に特徴をもつ……[6]」と書いている。

以下では、上のようなイメージや当事者による記述がどのような事実に基づくものなのかを検証してみたい。このような試みにどのような意味があるのか予め述べておくならば、日本の宗教学の形成を姉崎正治、岸本英夫というラインに代表させて語ってきた従来の東大系の宗教学の自分語りや、海外向けに提示される日本の宗教学の素描において京都学派の宗教哲学が大きく取り上げられることの偏りを、学生の教育をも視野に入れて日本の各大学の動向の布置を視野に入れることで修正できるということが考えられる。それを経て初めて、日本の宗教学の固有性や特徴を論じることが可能になるのではないだろうか[7]。本稿はそのような試みに向けての一つの試論となる。なお、東北大学の宗教学を堀一郎の名前とともに想起する人々も多いと思われるが、本稿では堀の業績には触れていない。時期的に堀一郎以前の東北帝国大学宗教学講座が本稿の対象となっている。

１．帝国大学における宗教学の展開（東京編）

東北帝国大学における宗教学の展開を検討するための補助線として、まず、東京帝国大学における宗教学講座の成立と展開の概略を踏まえておく[8]。

まず、帝国大学で宗教が講じられた嚆矢は、1879 年の原坦山による仏書購読であった。これはあくまで仏教の哲学的側面を教えるという加藤弘之の要望に沿ったものであり、その後も井上哲次郎の比較宗教及び東洋哲学という題目が示すように、あくまでも、西洋哲学に対抗する東洋の哲学を仏教に求めるという趣旨で仏教が扱われた。漢籍とサンスクリットによって文献

研究が行なわれるようになり、一方、宗学的なものは私学において行われるようになった[9]。

「宗教学」の講義が初めて行われたのは姉崎正治による「宗教学緒論」(1898)であり、姉崎が留学から帰朝した 1903 年以降、毎年宗教学の講義が開講されるようになった。宗教学講座の設置は 1905 年であった。初期の宗教関係講義題目のいくつかを拾ってみる。

「神秘主義」(姉崎、1903)、「宗教概論特に仏教と基督教との対照」（姉崎、1904）、「仏教の信行と仏陀の人格」（姉崎、1905）、「基督教発達史」（ケーベル、1905、1906）、「宗教概論」「神人の信仰」（姉崎、1906）、「原始基督教」（波多野精一、1907）、「仏教」（姉崎、1908）

一見してすぐにわかることは、姉崎が概論とともに、『復活の曙光』(1904)に見られるようなロマン主義的な立場から宗教論を講じ、一方で毎年、世界二大宗教と見なされていた仏教とキリスト教に関する講義が開かれるという構成である。1910 年からは加藤玄智の「神道研究」が加わる。もちろん、当時の文科大学の開講科目全体として見れば、村上専精、前田慧雲らによっても仏教関係の講義が行われており、仏教が重視されていたということは指摘できる。姉崎正治が、帝国大学に「神学講座」ができたという誤解を正すために草した「文科大学の神学講座」(1907)によれば、ケーベルの講義は「哲学史担任の副事業」であり、宗教学に続いて講座が設置されるとすれば、「印度哲学」、「日本宗教史」、「キリスト教史と一般宗教史」の順であろうとされている[10]。この後、印度哲学は大正末年までに第三講座まで設置され、神道講座も大正 10 年に設置される。姉崎が宗教学固有の領域を上に挙げた諸分野と区別されるものとして考えていたことがうかがわれる。姉崎の学問姿勢は、普遍的宗教性への期待や諸宗教に対する共感的理解という言葉で特徴づけられると思われるが、深澤英隆は「学者とも宗教人とも言える両義性を、高揚するままに生き抜[11]」いたと指摘し、これは林淳が指摘するように、後継者が検証したり深めたりするような研究を遺さず、著作において学祖たり得なかったというスタイルでもあった[12]。

明治期の東京帝国大学の宗教学の卒業論文に目を転じてみると、明治末には「高僧の研究」が流行っていたという証言のとおり、論文題目には源信、オリゲネス、龍樹、親鸞、法然、パウロ、イエス、アウグスティヌス、道元、聖徳太子、善導大師、覚鑁上人といった名前が見出される。知的・霊的エリートの内面的境地への関心が高まり、それを記述し、理解しようとすることが宗教学であるという学問観が、学生の間には存在したのではないかと考えられる[13]。

大正期の卒業論文の題目からは、欧米の宗教心理学や宗教社会学が学ばれるようになったことがわかるが、欧米の理論の導入によって宗教学の成熟に重要な役割を果たしたのは宇野圓空であった。宇野は、フランス社会学派、ドイツ文化史学派、イギリス人類学派の諸学説の紹介に努め、実証的な学問を世に問うたと評価され、[14]演習では英独仏の最新の研究書をテキストに使用した。宇野の指導を受けた世代からは、古野清人（1926 年卒）の他、杉浦健一（1931 年卒)、棚瀬襄爾（1934 年卒)、小口偉一（1935 年卒）等、民族学や社会学の方法に依拠する宗教学者が現われた。大正から昭和初期にかけての卒業生の中には、新宗教とりわけ天理教の子弟の入学が目立つことも注目される（1929 中山正善、1931 上田嘉成、1932 中山慶一、1938 諸井慶徳など）。

姉崎正治の退官は 1934 年で、宗教史を担当した石橋智信が宇野とともに宗教学を支える体

制が続いたが、やがて姉崎の後継となるのが岸本英夫である。岸本はアメリカ流の実証主義に立ち、宗教心理学・宗教社会学・宗教哲学・宗教史という四分野で宗教学を構想したと言われるが、それは戦後の展開である。

２．各帝国大学への卒業生の配置

東京帝国大学に続き、各地の帝国大学にも宗教学講座が設置されていき、姉崎正治の門下生が教官として配置されていく。東京帝国大学の学部卒業年、氏名、「卒業論文題目」→赴任先（赴任年、職名）の順にリストに示すと次のようになる。なお、矢吹、石橋、宇野はいずれも助教授採用以前に講師を務めている。

1907 鈴木宗忠「僧佉の発達に就て」→東北帝国大学(1924 教授)※
1909 矢吹慶輝「無量寿経に就き」→東京帝国大学(1924 助教授)
1909 石橋智信「旧約信仰の起源」→東京帝国大学(1920 助教授)
1910 宇野圓空「平安朝の修験道」→東京帝国大学(1927 助教授)
1917 佐野勝也「宗教学に於ける宗教心理学の地位」→九州帝国大学(1925 助教授)
1926 石津照璽「摩訶止観に於ける六即の過程」→東北帝国大学(1938 助教授) ※
1926 岸本英夫「祈りの問題」→東京帝国大学(1945 助教授)
1926 古野清人「エミル・デュルケイムの宗教思想」→九州大学(1948 教授)
1928 大畠　清「旧約聖書に於ける罪悪感の変遷」→東京帝国大学(1947 助教授)
1932 諸戸素純「祭司階級の社会的性質と組織」→東北帝国大学(1944 助教授) ※
1932 竹園賢了「情操的態度として見たる宗教」→東北帝国大学(1946 助教授) ※

1917 年の佐野勝也までが、姉崎正治が宗教学講座の中心を担った時期の第一世代であり、1926 年の石津照璽からは、宇野圓空が講座に加わって以降の第二世代であると言うことができる。（宇野は 1926 年に講師、翌年に助教授就任であるが、石津は卒業と同時に大学院に入学しているので、両者の在籍年度には重なりがある。）

さて、いささか前置きが長くなったが、上の人名のうち、※印を付した鈴木宗忠、石津照璽、諸戸素純、竹園賢了が本稿で扱う東北帝国大学に赴任している。鈴木と石津については後述する。

３．東北帝国大学の開設と宗教学講座設置

東北帝国大学設置が農科大学、理科大学、医科大学の三分科大学を擁して設立されたのは明治40(1907)年であったが、法文学部の設置は大正11(1922)年8月であった。『東北大学五十年史』によれば、当時、大学設立に向けて恵まれた条件が揃っていた。日本は膨大な外貨を保有しており、政友会内閣が学校大増設の方針をとっていたこと。円高により「想像を絶するほどの豊富な図書」の購入や教授候補者の外遊が可能だったこと。帝国大学における法文系学部の新設は京都帝国大学文科大学の設立（1906）から17年ぶりであり、帝国大学出の優秀な人材が野に

みちていたことなどである。教授の候補となったのは、「森鴎外・夏目漱石の世代より約二〇年おくれ、ケーベル等からドイツ観念論を本格的に学び、自然主義時代に大学を卒業して理想主義哲学を唱える世代であり、同時に大戦を契機にいちじるしく進んだ社会主義の思想・学問を本格的に学び始めた世代」であった[15]。

社会が高等教育に求めるものも変化しており、明治期の法律万能の官僚育成方針が広い教養と知識を持つ人材の養成へと転換していた。このような新しい理想を掲げて法文経の三学部性格を併せた法文学部が構想され、「徹底的な自由聴講制、法文相通ずる学科科目の配分、法文共通の単位制度の実施」などが規則に盛り込まれることになった。初年度の入学者は80名（法60、文20）であったが、高等学校の卒業生以外にも門戸を開き、女子三名が含まれていたことがしばしば特記されている[16]。

法文学部におかれた講座のうち文学関係は、社会学1、史学6、哲学3、印度学2、心理学1、倫理学1、美学1、教育学1、文化史学2、支那学2、宗教学1、国文学2、西洋文学2、の合計25講座であった（1926年時点。宗教学講座の設置は1924年7月）。特筆すべきは、法科文科や専攻によって在学生の区別をせず[17]、履修した科目と卒業論文の性質によって法学士・経済学士・文学士のいずれかの称号を与えるという新機軸であった[18]。もっとも、自由選択とは言っても、「科目標準類別」によって、専攻しようとする学科に応じた履修の目安が示されていた。その一つとして挙げられた「宗教学」は「宗教哲学・仏教学・基督教・特殊宗教・宗教制度」に分かれるとされている[19]。このような雰囲気の中で、各講座の研究室は独立せず、宗教学は印度学との合同で研究室を持っていた[20]。

４．初期教官のプロフィール１（鈴木宗忠）

さて、新設された東北帝国大学法文学部の宗教学講座の初代教授となったのは鈴木宗忠（1881-1963）であった。年譜と著作の主要なところを示すと次のとおりである[21]。

鈴木宗忠（すずき・むねただ） 明治 14(1881)-昭和 31(1963)
1881 愛知県の農家の三男として生まれる。幼名泰次郎。
1894 臨済宗妙心寺派の東観音寺に入寺。翌年得度して宗奕と改名。
1896 岐阜の妙心寺派普通学林に入学（1898　同学林は京都花園妙心寺派普通学林に合併）。
1899 上京して京北中学四年に編入。
1901 一高入学。
1904 東京帝国大学文科大学入学。
1907 同卒業（論文「僧侶の発達に就て」）。
1913 東観音寺の住職任命（一年猶予）。
1914 東京帝国大学文科大学嘱託。
1915 宗忠と改名。
1918 東観音寺住職依願退任。
1921 「カントの宗教論に於ける中心思想」によって文学博士。
1922 官費留学（独仏英米）。

1923 東北帝国大学任官、宗教学講座担任。
1927 東観音寺住職再任（翌年退任）。
1943 東北帝国大学退官。
1944 立正大学教授（～1946 公職追放）。
1952 駒澤大学教授（～1955）。
1953 「持戒精神でない身を顧みて」僧籍を離れる。
1954 日本大学教授（～1962）。
1963 逝去　葬儀は渋谷区福昌寺（曹洞宗）、法名「華蔵院殿昱堂宗忠大居士」。

主要著作
ヘフデング『宗教哲學』姉崎正治序及評論、清水友次郎・鈴木宗奕共訳、博文館、1912
ルツァツチ『信教の自由と學問の獨立』姉崎正治・鈴木宗忠共訳、大同館、1915
（ティーレ）『チ氏宗教學原論』鈴木宗忠・早船慧雲共述、内田老鶴圃、1916
デュルケーム『デュルケム自殺論』鈴木宗忠・飛澤謙一共譯、寶文館、1932
『原始華厳哲学の研究』大東出版社、1934
『宗教学原論』日光書院、1948
『鈴木宗忠著作集』全８巻、鈴木宗忠著作集刊行会編、巌南堂書店、1977-1978
（『唯識哲学概説』、『唯識哲学研究』、『基本大乗　法華仏教』、『基本大乗　浄土仏教』、『基本大乗　秘密仏教』『根本大乗　大乗仏教総論・般若仏教・華厳仏教』『宗教学体系』『宗教学哲学研究』）

第一に目に付くことは、臨済宗僧侶としての経歴である。ご子息の追懐によれば「お寺さんがいないと葬儀法事が出来ないので困る」という村からの強いクレームに抗って宗門学校を離れて一高、東大へと進んだということである[22]。年譜に見える住職退任と再任には、学資を受けた寺と師への恩と学問の志との板挟みが垣間見える。次に、二系統の学問的経歴がある。一つは、一貫した仏教学方面の研究であり、もう一つは初期の宗教学関係の洋書の翻訳と、やや唐突に見えるカントの宗教論を扱った学位論文である。もっとも、後で触れることになるが、著作リストではなく鈴木宗忠の講義題目一覧を見れば、毎年のように宗教哲学を講じていることがわかる。

これら仏教信仰と人生行路の問題、そして二系統の関心に導かれた学問的営みの関係について、著作の上から丹念に吟味してみる余地もあるだろうが、今はその余裕がないので、いささか乱暴ながら彼の晩年の文章を引くことでこれに代えることとする。東北帝国大学退官、戦後の公職追放を経ての昭和 24 年、26 年のものである。

> 宗教学によって、仏教の真実相を明にし、哲学によって、仏教を思想界に活かす。一言にいはば、仏教救国が私の念願である。（昭和 24.10.28「十年のあゆみ　二、私の念願」『文化』21-5、東北大学文学会、1957 年、129 頁）

顧みれば四十余年前、先師の寵遇によって東京大学を出て、爾来仏教に関する学問を続け二十年間東北大学教授を勤(ママ)めたが、その間常に僧侶として籍を臨済宗妙心寺派に置き、再度受業寺に住職した。これは私としては幾分なりとも師恩に報ゆる道であると考えたからである。然るに今は齢古稀に達したので先師定中の照鑑を仰いで茲に所属の宗派を脱し、一仏教徒として自由な立場に立ち、余生を終りたいと思う。（昭和 26.10「十年のあゆみ　三、完終への一路」、前掲『文化』21-5、136 頁）

これらの言葉をどう評価するか。ひとつには、ここに信仰や理想と分離させない学問のあり方を見ることができ、それを姉崎正治などの宗教学第一世代の特徴であると指摘することができる[23]。しかし反対に、公的な立場を離れて初めてこのように宣言しているということは、学問の客観性を保持してきたことの裏返しであるともとれる。これは著作に立ち返って検討すべき課題であろう。また、僧籍を離脱して「一仏教徒として自由な立場に立」った上で積極的に仏教に関わっていこうとする態度は、中立を担保しながら宗教の価値を積極的に擁護した姉崎の態度を連想させるものでもあり、一つの典型的な宗教学者的態度であるとも言えよう。
鈴木宗忠はこの念願を、「仏教主義綜合大学」という形で実現させるヴィジョンも抱いていた。それは宗門大学のようなものの建設ではなく、少なくとも「文政、理農、医の三学部」と大学院を備え、「学術の蘊奥を究める」という壮大なものであった[24]。
鈴木宗忠の学問について、東北大学の宗教学講座内部の当事者はどのように観ていたのだろうか。楠正弘は『東北大学五十年史』の中で述べる。

（鈴木宗忠はカント研究で学位を取得したが）ところが半面教授が仏教研究の大家であることは種々の論文・講述に依り知られるところである。その意図する処は大乗仏教の研究をもって宗教学研究の基礎とせんとするところにあり、此のことは教授の「宗教学原論」（昭和 23）に明示されている。教授はここで従来の宗教学研究を批判し、宗教学をして真に世界の宗教学の位置に進ましめるべく、宗教の概念構成のために仏教に対しキリスト教と同等の位置を与へ、型理学の立場から宗教を理解せんとする立場を創るのである。また当講座の指導方針も此処にあった事を創設当時の回想として述べている。（「第五節　宗教学・宗教史」『東北大学五十年史・下』1960 年、1223-1224 頁）

ここでは、キリスト教をモデルに組み立てられてきた欧米の宗教学を、大乗仏教研究によって普遍的なものに高めるというヴィジョンが語られているが、そのような研究対象となるに値するものとして大乗仏教の価値を高めるという動機も推測できる。

５．初期教官のプロフィール２（石津照璽）

次に、東北帝国大学宗教学講座第二代教授となった石津照璽についてはすでにいくつかの研究があるので、ここでは簡単にふれることとする。

石津照璽（いしづ・てるじ）　明治 36(1903)-昭和 47(1972)[25]

山口県、浄土真宗明楽寺秋里照雲の次男として生まれる。4才で石津家養子。
1926 東京帝国大学卒業（卒業論文「摩訶止観に於ける六即の過程」）
1926 同大学院入学、研究題目「天台教理の発達」
1931 日本大学教授
1938 東北帝国大学助教授（43 年教授、66 年退官）
1963 東北大学学長
慶応大学、駒沢大学教授を歴任、日本宗教学会会長（四期）、IAHR 副会長を務めた。

著作
『佛教學方法論』佛教年鑑社、1934
『宗教哲学』上・下・續、佛教年鑑社、1934
『天台實相論の研究　存在の極相を索めて』弘文堂書房、1947
『宗教哲學の問題と方向』、弘文堂、1951
『宗教哲学研究』創文社、1968
『宗教哲学の場面と根底』創文社、1968
『宗教経験の基礎的構造』創文社、1968
『キェルケゴール研究』創文社、1974
『宗教的人間』創文社、1980

まず注目すべきは、浄土真宗寺院の出身であることである。そして、既に述べたとおり、石津の東京帝国大学在籍期間は宇野圓空の着任と重なる世代であったが、東大での研究対象は一貫して仏教（天台実相論）であった。それが、後述する東北帝国大学での講義題目や単行本の題目上では存在を隠して、全面に大きく出ているのは宗教哲学である。この両者の関係について藤原聖子は田丸徳善の言葉を引きながら、石津の宗教哲学は「天台実相論を中心とする仏教を実存主義の視点から再解釈したもの」であり、その目的は「伝統的仏教思想を現代哲学の問題設定の中で蘇らすことというよりも、宗教の本質を明らかにすることであり、その本質論が結果として天台実相論、実存主義といった特定の宗教・思想との親縁性を持ったのである」と論じている[26]。

また一方で、石津は「機能主義人類学の成果を積極的に取り入れ、また東北地方での長期にわたる実態調査をもとに、オシラ神やミコ・行者に関する論考を主にその晩年に発表し、そのいずれもが学会において高い評価を得ている[27]」とも評価されている。

石津が大学で行なっていた講義については、岡田重精の次のような証言がある。

> 石津先生は、宗教学概論でヤスパース、ハイデッガーなどの存在論からマリノフスキー、ラドクリフ-ブラウンなどの機能主義人類学やフロイド、サリヴァンなどの精神分析学に及び、宗教の究極的根拠や宗教経験の本質構造がたどられ、特講でキェルケゴールなどが講じられていた。[28]

このような人類学、心理学の取り入れに、宇野圓空の指導、あるいは同期の古野清人や岸本英夫の存在が影響している可能性もあることを指摘して、次に宗教学講座の開講科目に目を転じたい。

６．開講科目と卒業論文　昭和 30(1955)年度まで

先に述べたとおり、資料上の制約から、宗教学講座開設当初からの講義題目一覧を示すのは困難である。『東北帝国大學学生要覧』には毎年の「講義題目表」が掲載されているが、閲覧できたもっとも古い年度のものは昭和10年度のものであった。別表1として掲載した授業題目一覧作成にあたって、昭和5年度からは『哲学雑誌』「彙報」欄の「各帝大哲学関係講義題目」を参照し、昭和9年度からは『文化』（東北帝国大學文科会編輯）の「彙報」欄に拠った。したがって、宗教学講座が設置された大正13(1924)年から昭和4(1929)年にかけての情報が得られていないが、昭和5年以降の資料から開講科目の編成方針を比較的明瞭に見てとることができる。なお、昭和30年までで切ったことには、とりあえず戦後10年を区切りとしたこと以外に積極的な理由はない。

昭和5年から12年までは、年度によってばらつきはあるものの、鈴木宗忠が概論（一般講義、普通講義）と特殊講義、演習を担当し、概論では仏教を哲学的観点から論じるか、仏教と基督教を比較対照しながら世界宗教を論じ、演習ではヘーゲルの宗教哲学を扱っている。寺崎修一は秋田県出身で東京帝国大学の印度哲学科卒業の仏教学者であったが、日本仏教史、洋書を用いての宗教史を、後に出村悌三郎（後の東北学院第三代院長）が基督教史を担当するという分担であった。したがって全体としては宗教哲学、仏教、日本仏教、宗教史、キリスト教についての授業が提供されていたことになる。全体のバランスはほぼ明治期の東大の宗教学関係科目と一致していると言える。

この開講科目の構成自体は、昭和11年に寺崎が急逝し[29]、出村悌三郎が出村剛（後の東北学院第四代院長）に代わるなど顔ぶれは異なりながらも、基本的枠組として踏襲されていく。しかし、昭和13年に石津が助教授としてスタッフに加わると、鈴木はもっぱら仏教を扱うようになり、宗教哲学は石津が一手に引き受けるようになる。以上から、設立期から昭和戦前期における東北帝国大学の宗教学において「学風」のようなものがあるとすれば、仏教と宗教哲学の重視にそれを求めることができるだろう。キリスト教への目配りもなされているが、昭和15年からは時勢に配慮してか、「東洋宗教史」「日本精神」が扱われるようになっていき、昭和16年にはキリスト教の講義が姿を消している。

この時期の学生の動向については不明なことが多いが、別表2aとして掲載したデータは『法文学部卒業生名簿』（昭和12年版、昭和32年版）に拠るものである。卒業論文題目の記載はなく、例外的に小田原尚興「フィヒテの宗教哲学」のみ、『文化』6-4(1939)の「彙報」から拾うことができた。曹洞宗大学（現東北福祉大）からの入学者（江田俊雄、東田大童）をはじめ、東北地方の宗教界の関係者（神尾文猷、小笠原正敏、山崎教正）が宗教学を専攻して卒業したことがわかる。1943年に編入学した楠正弘によれば、当時の「履修要望科目」には古典語が含まれ、大学院生はいずれも宗教哲学専攻でマックス・シェーラーやシュライエルマッハーなど

が研究されていた。楠は、石津退官の1965年頃までは「所謂、「東北大カラー」と言われる思想系の研究が多かった」と述懐している[30]。

次に、鈴木宗忠の退官(1943)後の開講科目を概観する。終戦前後の資料がないが、昭和23～26年の講義題目を観ると、宗教哲学（石津）と日本仏教史（諸戸素純）に加えて、外部から講師を招いてキリスト教を講じるという従来の構成を維持しようとしていたことがうかがわれる。ただし、この時期は人事面で不安定要素があったようで、東大宗教学講座の出身であった諸戸素純[31]は1951年に大阪市立大学に転任し、同じく東大宗教学講座の出身で宗教心理学を担当した竹園賢了（ポストは印度学第二講座）は、1952年に大阪学芸大学へと転任している。

これを受けて1951年に着任したのが東大の印度哲学出身の堀一郎であり、これによって、開講科目は石津による宗教哲学と堀による日本宗教史に外部講師（大畠清）の基督教史という体制に変わっていく。堀の担当は日本「仏教」史ではなく日本「宗教」史であり、ここに来て講義題目から仏教色がやや薄まった感がある。

もう一つ、注目すべき変化が、昭和26年以降の石津の演習での使用テキストである。マリノフスキー、ラドクリフ–ブラウン、エヴァンス–プリチャードの著作が読まれ、上に引いた岡田重精の証言の通り、機能主義人類学や精神分析学などを積極的に取り入れていったことが分かる。これは、木村敏明が石津の「晩期」の特徴であると指摘する実証的研究の開始を反映したもので、石津は自ら行なった東北地方の実態調査を踏まえてシャーマニズム研究へと向かっていく。ここに来て、冒頭近くで引いた「石津以来の宗教の哲学的研究と実証的研究の統合を志向する研究視角」という東北大学宗教学講座の特徴が具体的なものとなったことが確認される。

この事情を楠正弘は「外圧」の存在を示唆して、やや否定的なトーンで記述している。すなわち、一つには米軍の占領政策を遠因として「従来、主として宗教哲学を研究してきた東北大学の宗教学の一角が崩れ始め、東京大学から実証系社会学の教授が講義に加わるようになってきた。…学生は思想系と宗教史系とに分れていた…、社会学系の講義の増加に伴って学生の中にはアメリカ系の実証的な宗教研究に興味を示す者も現れた。敗戦を境にして、日本社会の思潮の中心は（ドイツ）哲学万能主義から（アメリカ）社会・心理学中心に移動し始めた。[32]」

もっと直接的な要因として、「東京大学では、岸本教授の下で柳川〔啓一〕氏による新興宗教の調査が計画され、これと対応するように、石津研究室は東北地方の民俗調査を分担することになった」という事情があったようだが、これにより、思想系研究を重んずる「東北大カラー」に変化が生じ、「実証的研究」へと向かったことが、「京都大学、東京大学には見られない特異な変化であった」とされる[33]。

「研究生たちは積み重ねてきたフォイエルバッハ、ハイデガー、キルケゴール、オットー、仏教哲学、仏教史学など、自分の理論研究を守りながら、何らかの形で実証的な研究へ参加していった[34]」というのが楠による回顧であるが、それの傾向は学生の卒業論文題目からもうかがわれる。別表 2b は「研究生」ではなく、学部生による卒業論文であるが（1948 年～1956 年）、宗教心理、マリノフスキー、ラドクリフ–ブラウンといった名前が散見されるものの、多くはヘーゲル、キルケゴール、ハイデッガー等、宗教哲学を扱っており、そこにキリスト教思想や日本仏教を扱ったものが混じるという傾向が見てとれる。

この他に興味深いのは、中島秀夫(1949 年卒、天理大学教授)、島村久二夫(1950 年卒)、中山正信(1950 年卒、天理教内統領)、小森正信(1951 年卒、天理教東肥大教会六代会長)、天満益信(1953 年卒)と、天理教の関係者の卒業が相次いでいることである。これを見ると、東北大学の宗教学は天理教と関係が深い、ということになりそうだが、そのきっかけは、法科に籍があった中島秀夫が、たまたま学生部長をしていた石津に進路相談をしたことであった。石津が東大の宗教学科時代に天理教二代目真柱の中山正善の二年先輩であったという縁もあり、中島は宗教学に転籍し、友人達が後に続いたということのようである[35]。したがって、天理教が教団としての意図をもって子弟を東北大に学に送り込んだというわけではないようであるが、後に天理大学理事を務める中島をはじめとする教団の中心を担う存在を多く輩出したことは、上述したように、その 20 年前に多くの天理教関係者が東大宗教学科に学んだこととあわせて興味深い事実である[36]。

７．結びにかえて

以上、東北帝国大学の宗教学講座の「学風」の形成を概観してきたが、論点を振り返ってまとめとしたい。まず、初代教授の鈴木宗忠の研究対象は大乗仏教と宗教哲学であり、仏基二大宗教の一方である仏教の中に高度に洗練された哲学と宗教体験を見出し、究極には「仏教救国」という理想を目指していた。宗教学講座の開講科目もこれを反映して、宗教哲学と大乗仏教、日本仏教史と基督教史が講じられていた。

石津照璽もまた、仏教（天台実相論）と宗教哲学を研究対象としたが、昭和 20 年代後半から、機能主義人類学の方法を取り入れて東北の民俗調査にも着手し、実証的な研究へと向かっていった。これは外的諸事情（「外圧」）のためでもあったが、石津が東大で宇野圓空に学んだ世代であることも影響している可能性が考えられる。開講科目からは仏教色が薄れて日本宗教史へと比重が移り、今日東北大学宗教学講座の学風とされる「哲学的研究と実証的研究の統合」というスタイルが生じた。ただし、昭和 30 年頃までは、学生の間には思想系を重視する「東北大カラー」がまだ色濃く残っていた。

この変化の間にある苦悩を背負ったのが楠正弘であった。カントの宗教論をまとめることと実証的民俗調査とをともに命じられた重圧の末に結核に倒れ、さらに東北の巫女は憑依型であってシャーマンではないというエリアーデの指摘（「エリアーデ・ショック」）から這い上がるという使命を負わされたという楠正弘の記述は多分に主観的な想いのこもったものであるが、当事者の率直な感想であろう。東北大学の宗教哲学の系譜は、初の東北大学出身教官となった楠正弘、そして華園聰麿へと引き継がれていくが、2007 年に華園が退官することで途絶えることとなった。また、実証的研究の方は、民間信仰研究として堀一郎から、鈴木岩弓へと連なっている。

本稿の冒頭近くで、「歴代の教員には浄土真宗の背景を持つ者が多い」というイメージを紹介したが、歴代教官の仏教的背景は次のとおりである。

鈴木宗忠・・・臨済宗妙心寺派（愛知県）で得度、住職となる。

石津照璽・・・浄土真宗本願寺派明楽寺（山口県）出身。

諸戸素純・・・浄土宗等覚寺（兵庫県）出身。

堀　一郎・・・〔東京帝国大学文学部印度哲学科出身〕

楠　正弘・・・浄土真宗本願寺派寺院（京都府）出身。

山折哲雄・・・浄土真宗本願寺派の海外布教師を父に持つ（岩手県）。

華園聰麿・・・真宗大谷派安祥寺（山形県）出身。

全員が浄土真宗ではないものの、たしかに仏教色が歴然としていることがわかる。これは結果としてそうなったに過ぎず､学問とは切り離して考えなければならないとも言えるが､「学風」や「カラー」というものは、このような個人的背景とともに語られ、印象として残っていくものであろう。楠正弘への弔辞が東北大学宗教学研究室の紀要である『東北宗教学』に掲載されているが、そこには「先生の病床には「南無阿弥陀仏」の掛け軸が下がっていました。以前より､「念仏を唱えると痛みが安らぐんだよ」と仰っていたことを思い出しました。〔中略〕先生、これからもお浄土から私たちを温かく見守り続けてください。[37]」「先生は浄土真宗の寺院にお生まれになり、宗祖親鸞聖人に深い畏敬と尊崇の念を抱いてこられました。〔中略〕ここに謹んで、お浄土への先生の旅立ちをお見送りいたします。[38]」といった言葉が記されている。楠の仏教信仰が研究室内の共通認識となっていたことがうかがわれ、研究室内部の仏教信仰への温かい眼差しも感じられる。こうしてみると、東北大学の宗教学の「学風」とは、伝統仏教寺院（浄土真宗）出身の教員の配置、宗教哲学的研究の素養、実証主義的研究（東北地方での民俗調査）という諸要素によって形成されてきたものと見ることができる。このうち仏教の背景を持つ教員は華園以降はおらず、宗教哲学を専門とする教員も華園で途絶えているので、現在では実証主義的研究（東北地方での民俗調査）に関して、宗教民俗学・人類学を専門とする鈴木岩弓が東北大学の学風を継いでいるということになる。

ただし、述べてきたとおり「学風」なるものは多分に偶然性に左右されるものであり、一貫した論理として提示できるようなものではない。「学風」とは何かという定義をすることなく論を進めてきたが、厳密な「実証」に馴染まない曖昧で漠然としたものが「学風」であるとも考えられる。また、本来、鈴木宗忠や石津照璽らの著作に即した検討も行なわなくては不十分であることは言うまでもない。資料に関しても、戦前期の講義内容や学生の動向を示すものの発見、収集には課題を残している。様々な課題に向かうことは他日を期すこととする。東北大学宗教学講座の当事者、関係者にしてみれば、的外れに感じる部分もあろうかと思うが、若干の資料を提示したことで当面の役割は果たしたと考え、これをもって結びとする。

東北大学大学史関係資料 主要なもの

『東北大学法文学部略史』1953

『東北帝国大学法文学部学生要覧』1935、1937-1942

『東北帝国大学法文学部卒業生名簿』1937

『会員名簿　昭和三十二年十一月現在』東北大学文学部同窓会

『文化』東北大学文学会、昭和 9 年～　（卒論題目、講義題目掲載）

『哲学雑誌』昭和 5 年度～、（雑録、彙報欄に各帝国大学開講科目掲載）

別表 1

東北大学宗教学関係授業科目一覧（昭和 5 年～昭和 30 年）

【担当教員名】 【授業種別】 【授業題目】

昭和 5
鈴木宗忠 宗教体験としての大乗仏教
鈴木宗忠　演習　Émile Durkheim, *Les formes élémentaires de la vie religieuse*（社会学演習と共通）
鈴木宗忠 講読 梵漢対照倶舎論頌
寺崎修一 日本仏教史　平安朝仏教史
寺崎修一 日本仏教史演習　凝然著八宗綱要
出村悌三郎 基督教史　ポーロの神学思想

昭和 6
鈴木宗忠 一般講義 宗教体験としての大乗仏教　般若経と華厳経
鈴木宗忠 特殊講義 倶舎論頌の梵語対照研究
鈴木宗忠 演習 Hegel Begriff der Religion
寺崎修一 日本仏教史 平安朝仏教史 前学年の続き
寺崎修一 日本仏教史演習　源信著一乗要決
出村悌三郎 基督教史 ポーロの宗教及び神学思想

昭和 7
鈴木宗忠 概論 〔題目未詳〕
鈴木宗忠 演習 ヘーゲル宗教哲学　フェノメノロギーに於ける道徳と宗教と哲学(Hegel: *Phaenomenologie des Geistes*)
鈴木宗忠 購読 倶舎論還滅門　随眠品及賢聖品

昭和 8
鈴木宗忠 普通講義 宗教体験としての華厳仏教
鈴木宗忠 特殊講義 華厳哲学研究（華厳五教章対照本配布）
鈴木宗忠 演習 ヘーゲル宗教哲学　エンチクロペディに於ける芸術と宗教と哲学

昭和 9
鈴木宗忠 概論 〔題目未詳〕
鈴木宗忠 特殊講義 唯識哲学に於ける唯識思想の展開
鈴木宗忠　演習　ヘーゲル宗教哲学(Hegel: Encyclopaedie)
寺崎修一　日本仏教史特に鎌倉時代浄土教を中心として
寺崎修一　演習　E. Washburn Hopkins: *The History of Religion*.
出村悌三郎 基督教史 宗教改革後の基督史

昭和 10
鈴木宗忠 概論 主として仏教と基督教との対照
鈴木宗忠 特殊講義 宗教体験としての法華仏教
鈴木宗忠　演習　弁証法神学の基本問題 Theologische Exisenz heute.
寺崎修一　日本仏教史概説特に鎌倉時代を中心として
寺崎修一　演習　E. Washburn Hopkins: *The History of Religion*.
出村剛 基督教史 McGiffert: *Protestant Thought before Kant*.

昭和 11
鈴木宗忠 概論 現在の世界教を根基としての宗教の理解
鈴木宗忠 特殊講義 大乗仏教の真髄
鈴木宗忠 演習 現代の宗教哲学
寺崎修一 日本仏教史概説特に平安時代
寺崎修一 演習 Soederblom, *Einfuehrung in die Religionsgeschchite*
出村悌三郎　基督教史　ポーロの神学とギリシャ思想

昭和 12.4
鈴木宗忠 概論 〔題目未詳〕
鈴木宗忠 特殊講義 唯識哲学
鈴木宗忠 演習 民族学派の宗教学
花山信勝 連続講義
出村剛 基督教史 基督観の史的諸相
鈴木宗忠 演習 Soederblom, *Einfuehrung in die Religionsgeschchite*.

昭和 13
鈴木宗忠 講義 宗教体験としての浄土仏教
石津照璽 講義 宗教哲学の諸問題
鈴木宗忠 演習 世親の唯識哲学　唯識三十頌梵文註
石津照璽 演習 ヘーゲルの宗教哲学
鈴木宗忠 講義 日本仏教史　初期の真宗、親鸞と法然
出村剛 講義 基督教史　思想史を中心として観たる十四･十五･十六世紀に於けるヨーロッパ教会の歴史
鈴木宗忠 演習 歴史学派の宗教学

昭和 14
鈴木宗忠 講義 宗教哲学の体系としての唯識哲学
石津照璽 講義 宗教的境遇、境地及び表現
鈴木宗忠 演習 世親以降の唯識哲学（『成唯識論』）
石津照璽　演習　ヘーゲルの宗教哲学(Hegel: Die absolute Religion(*Vorlesungen ueber die*

Philosophie der Religion)(T. IV))
花山信勝 講義 東洋宗教史　日本仏教史概説（連続講義）
石原謙 講義 西洋宗教史　アウグスティヌスの歴史哲学（流用）
鈴木宗忠　演習　文化史学派の宗教学(W. Schmidt: *Handbuch der Vergleichenden Religionsgeschichte*. 1930)

昭和 15
鈴木宗忠 講義 宗教学説論　主として仏教と基督教との対照
石津照璽 講義 宗教的境地及び表現
鈴木宗忠 演習 世親以降の唯識哲学
石津照璽　演習　ヘーゲルの宗教哲学(Hegel: *Die absolute Religion(Philosophie der ReligionI. III.)*
鈴木宗忠 講義 東洋宗教史　東洋宗教史の問題としての天台の宗教
石原謙 講義 西洋宗教史　原始キリスト教思想史（特に新約聖書）
鈴木宗忠 演習 支那宗教史に於ける仏道二教の交渉

昭和 16
鈴木宗忠 講義 宗教体験としての大乗秘密仏教
石津照璽 特殊講義 宗教的関係に於ける主体の問題
鈴木宗忠 特殊講義 無著の唯識哲学
石津照璽　演習　ヘーゲルの宗教哲学(Hegel: *Die absolute Religion(Philosophie der Religion Teil II.)*
大屋 講義 東洋宗教史　奈良朝仏教
鈴木宗忠 演習 支那宗教史に於ける仏教と儒教との交流

昭和 17
鈴木宗忠 講義 大乗秘密仏教としての金剛頂教
石津照璽 講義 宗教の根拠
鈴木宗忠 演習 弥勒の唯識哲学（中邊分別論）
石津照璽　演習　ヘーゲルの宗教哲学(Hegel: *Die absolute Religion(Philosophie der Religion T. III.)*
鈴木宗忠 講義 東洋宗教史　東洋宗教史日本精神の展開（特に神、儒、仏三教を顧慮して）
鈴木宗忠 演習 聖徳太子の仏教思想

昭和 23
石津照璽 概論 〔題目未詳〕
石津照璽　特殊講義　宗教的人間（キェルケゴールの所論と吟味）
石津照璽 演習 〔題目未詳〕
諸戸素純 講義 日本中古宗教史
諸戸素純 演習 最澄「顕戒論」

昭和 24
石津照璽 概論 〔題目未詳〕
石津照璽 特殊講義 宗教的対象の研究
石津照璽　演習　Schmidt, *Vergleichende Religions- geschite*
竹園賢了　演習　W. James, *The Varieties of Religious Experience.*
諸戸素純 普通講義 祖先崇拝の問題
諸戸素純 日本宗教史演習 選択集
中川 キリスト教史 （連続講義）

昭和 26
石津照璽 普通講義 宗教の本質
石津照璽 特殊講義 宗教の根拠
石津照璽 演習 Malinowski, *Scientific Theory of Culture*. Malinowski, *Magic, Science and Religion*.
竹園賢了 演習 〔題目未詳〕
諸戸素純 普通講義 日本仏教史
諸戸素純 演習 〔題目未詳〕
大畠清 基督教史 〔題目未詳〕

昭和 27
石津照璽 普通講義 宗教の本質
石津照璽 特殊講義 宗教の根拠
石津照璽 演習 Malinowski, *Scientific Theory of Culture*. Malinowski, *Magic, Science and Religion*.
石津照璽 +堀一郎 実習 宗教習俗の調査実習
堀一郎 普通講義 日本宗教史の主要問題
堀一郎 演習 〔題目未詳〕
大畠清 基督教史（連続講義） 〔題目未詳〕

昭和 28
石津照璽 普通講義 宗教の機能と期限
石津照璽 特殊講義 不安の問題
石津照璽 演習 Radcliffe Brown: *Structure and Function*（社会学演習に代用）
堀一郎 普通講義 日本宗教史概論
堀一郎 演習 〔題目未詳〕

昭和 29
石津照璽 普通講義 〔題目未詳〕
石津照璽 特殊講義
石津照璽 演習 Radcliffe Brown: *Structure and Function in Primitive Society*. Evans-Pritchard: *The Social Anthropology*（社会学演習代用）
堀一郎 普通講義
堀一郎 演習 『三国仏法伝通縁起巻下』
堀一郎 特殊研究 E. O. James; *The Beginnings of Religion* 1948.
大畠清 キリスト教史 （連続講義）

昭和 30
石津照璽 普通講義
石津照璽 特殊講義 キェールケゴール研究
石津照璽 演習 不安の研究
堀一郎 普通講義 日本仏教史概説
堀一郎 演習 『元亨釈書』
楠正弘 演習 全学年の継続
大畠清 キリスト教史 （連続講義）

別表２a

東北帝国大学宗教学科卒業生　昭和 5 年度～昭和 30 年度

【卒業年】【氏名】【昭和 32 年時点所属】【〔出身校・昭和 12 年時点所属〕】《備考》

1931[1933].3 阿部三郎 没〔広島高師・法文学部副手〕
1930.3 佐藤米三郎 〔大阪外語・仙台市連坊小路尋常小学校〕没
1929.3 廿日出厖 没〔本検・近江商業学校長〕《興誠学園創立、自由党参議院議員》
1926.3 江田俊雄 駒大〔曹洞宗大・中央仏教専門学校 （京城)〕
1928.3 宗（徳永）チフ 無記載〔京都市立二条高等女学校〕
1928.3 東田大童 没〔曹洞宗大・梅檀中学校（現東北福祉大)〕
1929.3 里見安吉 西南学院大学 ・同図書館長
1939.3 小田原尚興 東北大学富沢分校《卒業論文「フィヒテの宗教哲学」》
1941.12 神尾文猷 東北大学学生部厚生課長《仙台市浄土宗正雲寺住職》
1944.9 小笠原政敏 東北学院 《仙台長町教会牧師》
1944.9 平岡弘至（旧・一男） 柴田ゴム工業
1944.9 山崎教正 岩手県岩手郡玉山村下田浄泉寺

別表２b〔★印は天理教関係者〕

【卒業年】【氏名】【卒業論文題目】【昭和 32 年時点所属】
1948.3 楠正弘 「マックス・シェラーに於ける宗教の本質—主として『人間に於ける永遠なるもの』に依る」 東北大学及聖和短大
1948.3 佐々木誠明 「パウロに於けるアガペーの思想」 記載なし
1948.3 米沢　紀 「パウル・ティリッヒの歴史観と終末論」 弘前学院短大
1949.3 岡田重精 「我国古代に於ける宗教的世界」 宮城県立工業高等学校
1949.3 楠〔旧姓金倉〕佳子 「親鸞における救済の構造 教行信証を中心として」 三島学園高等学校〔仙台市、現東北生活文化大学高等学校〕
1949.3 中島秀夫 「限界状況に於ける実存—その宗教的示唆—」 天理文化研究所員★
1950.3 島村久二夫 「ヘーゲルに於けるキリスト論」 天理教本部★
1950.3 中山正信 「シュミットに於ける宗教起源論としての原始一神教説—学的操作の問題—」 天理教本部★
1950.3 三輪盛文 「天台の普門品解釈に於ける観世音」 北多摩郡久留米村田無神医院〔昭和 19 年度医学部副手〕
1950.3 山本 保 「宗教の心理的基礎の一考察—特にフラワーの所論を中心として—」 北多摩郡久留米村南沢在住
1951.3 宮崎　眞 「On the Problem of Ethics of Jesus」 〔神奈川県逗子市在住〕
1951.3 阿部　昭 「キリスト証言としての創世記出埃及記の一部」 盲学校
1951.3 小森正信 「マリノウスキーに於ける呪術及び宗教の問題」 天理教本部★
1951.3 白鳥　繁 「旧約聖書『詩篇』に於ける罪の意識」 築館女子高校
1951.3 山村俊明 「キェルケゴールにおける宗教的実存」 善導寺住職〔仙台市〕
1952.3 佐藤隆学 「室町時代に於ける浄土宗の教団組織—問師の教学を中心として—」 山形中央高校
1952.3 中川聰佐 「宗教の本質的要素としての「聖」—Rudolf Otto について」〔東京都墨田区在住〕
1953.3 武居重明 「御嶽教を中心にしてみたる木曾嶽信仰の現況」 御嶽教本山、御嶽教二代目管長
1953.3 松〔杉?〕谷倫夫 「本来性について—ハイデッカー『存在と時間』より—」 静岡薬科大学
1953.3 和泉浄 「ドン・ジュアンの救済の可能性—人間の快楽と苦痛と悔ひ—」 New York City Bank

1953.3 杉山〔谷?〕治路 「宗教的実存の歩行―「不安の概念」の学び―」 仙台児童相談所
1953.3 天満益信 「シュライエルマッヘルの宗教論に見られる宗教の位置について」 天理外語学校★
1953.3 鈴木〔旧姓水上〕泰三 「経済倫理に於ける宗教的基礎について」 涌谷女子高校
1953.3 熊谷國準 「現実の世界の論理構造」 梅檀高校〔東北福祉大付属〕
1953.3 板橋長興 「道元の研究」
1953.3 大宮五郎 「ベネディクトの文化型論―特に宗教について―」
1954.3 月光善弘 「ワッハの宗教社会学」 東北大学大学院博士課程
1954.3 茂林俊童 「宗教的主体性に関する一考察―キィルケゴールの後書を中心として―」
1954.3 山形孝夫 「エクスターセの問題―ハイデガー《存在と時間》に於ける―」 東北大学大学院博士課程
1955.3 藤倉信子 「キェルケゴールにおける同時性の問題」 国際キリスト教大学助手
1955.3 生田邦夫 「R. Brown に於ける未開宗教論」 東北大学大学院博士課程
1955.3 村上ヤエ 「ヤスパースに於ける実存照明の問題」 聖和学園
1956.3 大内恵子 「キェルケゴオルに於ける苦悩の問題」 東北大学大学院修士課程
1956.3 川端純四郎 「ブルトマンに於ける終末論の研究」 東北大学大学院修士課程
1956.3 高橋敏郎 「デュルケムに於ける儀礼論」 東北大学大学院修士課程
1956.3 目黒政男 「ルターに於ける信仰と論理の再建」

註

1 高橋原「東京大学宗教学科の歴史――戦前を中心に」『季刊日本思想史』72、2008 年。
2 『東北大学五十年史・上』東北大学、1960 年、1022-1023 頁など。
3 同様の「伝説」に類するものとして、加藤玄智は宗教学から神道学に鞍替えしたが、最晩年には出身の真宗に回帰して葬儀は真宗式で行なわれたという説にしても、実際に調べてみるとたまたま縁があった曹洞宗の寺に葬儀を頼んだことがわかっている。島薗進・前川理子・高橋原「加藤玄智集　解説」『シリーズ日本の宗教学(3)　加藤玄智』第九巻所収、クレス出版、2004 年。また事実として、矢吹慶輝、田丸徳善は僧籍を残したまま東大宗教学講座の教員となっている。
4 九州大学は人類学に強く、北海道大学はキリスト教系の教員で占められてきたといったことも語られてきた。
5 木村敏明「『初期』石津宗教哲学における『成立性』概念――『晩期』の実証的研究との関連において」『論集』30、印度学宗教学会、2003 年。これは鈴木岩弓による「本講座の伝統は、石津以来の宗教の哲学的研究と実証的研究の統合を志向する研究視角に特徴をもつ」(『東北大学百年史　四　部局史一』2003 年、362 頁）という記述に沿ったものである。
6 〔鈴木岩弓〕「第二六節　宗教学専攻分野」『東北大学百年史　四　部局史一』2003 年、362 頁。
7 一つの試みが、2004 年日本宗教学会シンポジウム「日本の宗教研究の百年――欧米の宗教研究の移入とその日本的展開」金井新二、IAHR2005 パネル「日本の宗教研究」であったが、これは研究分野別のアプローチであった。
8 磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜』岩波書店、2003 年。「東京大学の宗教学の系譜――戦前を中心に――」日本宗教学会第 65 回学術大会、於東北大学、2006 年 9 月 17 日（パネル「近代日本と宗教学－複数性と系譜をめぐって－」)、「東京大学宗教学科の歴史――戦前を中心に」『季刊日本思想史』72、2008 年 1 月。pp. 153-169.　東大宗教学研究室 HP「研究室史データ」http://www.l.u-tokyo.ac.jp/religion/history.html
9 林淳「宗教系大学と宗教学」『季刊日本思想史』72、2008 年。
10 姉崎正治「文科大学の神学講座に就て」『新人』8-4、1907 年。姉崎正治の講座構想（鈴木範久「姉崎正治の講座構想――一書簡より――」『宗教学年報 I 別冊』1984 年。
11 深澤英隆「姉崎正治と近代の『宗教問題』――姉崎の宗教理論とそのコンテクスト――」『啓蒙と霊性』岩波書店、2006 年、120 頁。
12 林淳「近代日本における宗教学と仏教学」『宗教研究』2002 年、76-2 頁。
13 「ポスト嘲風・梁川世代のスピリチュアリティ□福島政雄と霜田静志を例として□」『スピリ

チュアリティの宗教史　下巻』リトン、2012 年。
14　小口偉一「故宇野円空氏来歴」『宗教研究』123 号、1949 年、158-159 頁。
15 『東北大学五十年史・上』東北大学、1960 年、187-192 頁。
16　同前。
17　学生名簿にも学科や専攻の別が示されていないことは資料調査を困難にしている。学部独立は戦後である。
18 東京帝国大学文科大学の場合は、学生は哲学科、史学科、文学科のいずれかに所属し、卒業試験のために専修学科を選択する制度であったが、宗教学が専修学科として認められたのが 1904 年、「宗教学宗教史学科」として哲学科から独立したのが 1918 年である。
19 前掲『東北大学五十年史・上』200-204 頁。
20 同前、231-232 頁。
21 「年譜」『鈴木宗忠著作集８　宗教学哲学研究』巌南堂書店、1978 年。鈴木宗忠「十年の歩み」『文化』21-5、1957 年。「鈴木宗忠」『日本仏教人名辞典』法蔵館、1992 年。
22 鈴木忠和「父の記」『鈴木宗忠著作集８　宗教学哲学研究』巌南堂書店、1978 年、455 頁。
23 小口偉一「宗教学五十年の歩み」『宗教研究』147、1956 年。
24 鈴木宗忠（昭和 24.10.28）、前掲「十年のあゆみ 二、私の念願」133 頁。また、次も参照。鈴木宗忠「学問論の上から見た仏教学の性格」『日本大学文学部研究年報』6、1950 年（『鈴木宗忠著作集』第七巻、1978 年、所収）。
25 「石津照璽」『日本仏教人名辞典』法蔵館、1992 年、他。
26 藤原聖子「石津照璽の宗教哲学――宗教学の学説史的観点から」『哲学年誌』８、大正大学哲学会、67-77 頁、2002-03、76 頁。田丸徳善「石津宗教哲学の示すもの」『創文』201、1980 年。楠正弘の評言は次のとおりである。「二〇世紀における日本の宗教哲学のなかで、西洋の宗教哲学、宗教人類学、宗教社会学の成果を吟味しながら、東洋的仏教哲学の視座の中に、人間存在の究極を糺し位置づけようとした石津宗教哲学は、なお、多くの問題を残しつつ、斯学に手堅い道標を築いたといえるであろう。」楠正弘「解説」『宗教哲学の場面と根底』創文社、1968 年。
27 木村敏明「『初期』石津宗教哲学における『成立性』概念――『晩期』の実証的研究との関連において」『論集』30、印度学宗教学会、2003 年、17 頁。木村はこの中で、石津の学問的営みの変遷を初期、中期、後期、晩期に区分して考察している。
28 岡田重精「回想――研究室在籍とその前後――」『東北宗教学』第 3 号、2007 年。
29 金倉圓照「寺崎修一助教授の逝去」『文化』3-5、1936 年。
30 楠正弘「東北大学文学部、宗教学宗教史研究室での歩み」『東北宗教学』4、2008 年。
31 なお、諸戸素純は兵庫県鳴尾村（現西宮市）の浄土宗等覚寺の生まれであった。「哀悼　諸戸素純氏」『甲陽通信』12、1970 年、10 頁
32 楠正弘「東北大学文学部、宗教学宗教史研究室での歩み」『東北宗教学』4、2008 年、2 頁。また、楠正弘『仏教信仰と民俗信仰』（創文社、2009）のあとがきにも詳細な回顧録がある。
33 同前、3 頁。
34 同前、3 頁。
35 佐藤浩司「中島秀夫先生のお出直しを悼む」*Glocal Tenri*, 12-9, 2011 年 9 月。
36 その後、東大では松本滋（聖心女子大学教授）、東北大学では橋本武人（天理大学学長）、澤井義次（天理大学教授）などを輩出した。「学風」と結びつけるかどうかは別として、その他にも多くの天理教関係者をあげ得る。
37 池上良正「弔辞　教え子を代表して」『東北宗教学』5、2009 年。
38 華園聰麿「弔辞」『東北宗教学』5、2009 年。